

## 【第6回】

## 次の100年に向けて

日本生理学会若手の会運営委員・100周年記念事業委員  
Beth Israel Deaconess Medical Center/Harvard Medical School Research fellow  
自治医科大学 客員研究員  
日本学術振興会 特別研究員 CPD  
佐藤 達之

この度は、日本生理学が100周年を迎えた記念すべき節目に際し、このような寄稿の機会を与えていただき、誠にありがとうございます。令和3-4年度と生理学会若手の会の運営委員長を務め、そのご縁から100周年記念事業委員に若手メンバーとして加えていただきました。丸中先生、伊佐先生をはじめとする委員の先生方、そして理事長の石川先生をはじめとする理事の先生方にご指導いただきながら100周年記念事業を進める中で、改めて日本生理学会の先輩方が世界の生理学の発展に多大な貢献をされてきたことを実感しております。また同時に、次の100年の日本の科学研究を担っていく若手研究者として、身が引き締まる思いです。

これまでの100年間で、生理学をはじめとするライフサイエンス領域は大きく広がりました。分子病 (Molecular disease) の概念の誕生、DNAの発見、そして分子生物学の勃興に伴い、生物学・基礎医学・臨床医学の垣根が下がり、生物学的知見が基礎研究を経て臨床医学に応用されること、また臨床医学の知見から逆に新たな生物学的発見が行われることも今や当たり前になりました。こうした人類の叡智とも言える学問の発展は、これまでの先輩方が強い決意と信念を持って研究を進められた結果なのだろうと思います。次の100年にどのような学問領域が広がっていくのか、まだ想像もつきませんが、その新たな時代の第一歩を作るのは我々であると、先輩方を見習い強い信念を持って、日々の研究に邁進したいと思います。

ライフサイエンスが学問として大きく広がった一方で、中高生の理科離れや、基礎研究を志向する若手の減少といった問題が浮き彫りになってきています。これらの問題の原因として、インターネットの普及によるグローバル化と研究のハイスピード化によって、研究がビジネス化され、インパクトファクターに重点が置かれるようになり、若手研究者のポジション問題が生じていることが挙げられます。これらの問題は科学者のみで解決することは難しく、社会全体で取り組んでいくべき課題ではないかと思います。科学の歴史を振り返りますと、真理を追求するという科学の目的それ自体は変わらず続いているものの、科学は社会と密接に関係しており、決して切り離すことはできません。現代において、生理学、そして科学全体が社会の中でどのような役割を果たすものなのか、今一度見つめ直し、我々の社会がどのような科学を目指していくのか考える必要があります。生理学に没頭すると同時に、若手の立場から、こうした科学を取り巻く課題にも目を向けていきたいと考えております。

我々生理学会若手の会では、日本生理学会に大きなバックアップをいただき、セミナーや大会シンポジウムの企画などを行っております。ボトムアップで自分が発案した企画を主催できる貴重な機会です。運営にご興味のある方は、ぜひ [yp-admin@umin.ac.jp](mailto:yp-admin@umin.ac.jp) までご連絡ください。一緒にこれからの100年を作っていきましょう。